

中学・高校における第二外国語としての 中国語学習への取り組み

米 井 由 美*

はじめに

筆者は縁あって2011年度から東京都練馬区にある東京女子学院中学高等学校にて中国語を教える機会をいただいた。2011年度、2012年度の二年間を終えた後、中国・上海へ留学し、帰国後、今年度より改めて教鞭を執っている。自分自身が学部時代に中国語を苦勞して学んだという経験をこの場で生かしたいと意気揚々と臨んだが、今年で三年目を迎えたものの、授業の運営や中国語の教授法については未だ暗中模索の日々である。本稿ではこれまでの授業の取り組みを振り返りつつ、一方であまり知られていない、中学校や高等学校でどのような中国語の授業が展開されているのかをその一端を紹介させていただきたい。

一. 東京女子学院中学高等学校での第二外国語教育

東京女子学院では「特色ある指導」の一つとして、中学二年次（一貫生。中高の内部進学者をさす）または高校一年次（高入生。外部進学者をさす）から週に二回の第二外国語の選択必修の授業がはじまる。第二外国語の授業は中国語とフランス語の二ヶ国語が用意され、どちらか一つを生徒が自由に選択することができる。一回の授業は50分であり、学期ごとに期末試験のみを実施している。また原則的に年に一度は検定試験を受けることになっている。今年度の第二外国語の選択状況は以下の表一のとおりである。

* 首都大学東京大学院

表一 2015 年度第二外国語の選択状況（2015 年 4 月時点）

中二	中三	高一〔一貫／高入〕	高二	高三
中国語 12 名	中国語 8 名	中国語 12 名 / 7 名	中国語 2 名	中国語 0 名
仏語 5 名	仏語 17 名	仏語 7 名 / 10 名	仏語 5 名	仏語 0 名

現在、一貫生は中二、中三、高一までが必修となり、高校二年次以上では選択授業の一つとして選択し学習を続けることもできる。一貫生であれば中二から高三まで、つまり最大で五年間学ぶことが可能である。これほど長い期間にわたって第二外国語を学べる学校は全国的に見てもとても珍しく、生徒本人の実力次第では、中国語検定三級に合格する者や学外の中国語スピーチコンテストで上位入賞を果たす者が出るなど、高校生としては十分に高いレベルの中国語力を身につけることができる。

高校からの進学者は校内では高入生と呼ばれ、入学時に中国語またはフランス語のうち一つを選択し、第二外国語のクラス編成は一貫生とは別に高入生専用のクラスが設けられている。高一では、一貫生の中国語クラス、高入生の中国語クラス、一貫生のフランス語クラス、高入生のフランス語クラスと四つのクラスに分かれて学習する。そのため、高入生は入門からじっくり学べ、また一貫生はこれまでのレベルどおりに学習できるというのはそれぞれの生徒にとって大きなメリットであるといえる。高二以上になると第二外国語は必修ではなく希望者のみ選択のかたちとなり、一貫生と高入生が合同で授業を受けることになる。その点を念頭に置きながら高入生の授業はとくに早足で進めざるをえない。

筆者は 2011 年度、2012 年度、2015 年度いずれも中二と高入生それぞれの入門レベルのクラスを担当している。生徒たちが中国語を選択した理由は「家族がすすめてくれた」「漢字があるので簡単そうに見えた」というほぼ二つに集約され、自主的に中国語を学びたいと思い選択したという生徒はほとんどいない。さらに昨今のメディアにみられる中国に対する負のイメージの先行によって、生徒たちが無意識的に「近くて遠い国」として距離を感じているともいえる。中国語を教える側としては、生徒がいかに

中国という国に興味を持ち、身近に感じられるようになるのかは常に考えさせられる点である。

二. 中国語の授業について

1) 基本的なねらい

文部科学省が制定する『中学校学習指導要領解説 外国語編』（以下学習指導要領と表記）¹における教科の目標は次のとおりである。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

学習指導要領では外国語＝英語という構図が主であるが、その他の外国語については「英語の目標及び内容等に準じて行うものとする」²ため、中国語においても「言語活動」と「言語材料」の取り扱いは英語のそれのできるかぎり倣うこととする。

これらの点をふまえ、東京女子学院での中国語の入門クラスの学習のねらいを以下のように定めた。

- ・ 中国語の正確な発音を身につけ、簡単な日常会話が行えるようになること。
- ・ 基本的な中国語の構造を理解し、簡単な文の読み書きが行えるよう

¹ 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』、平成 20 年 9 月初版、平成 23 年 4 月第三版参照。本稿執筆の際はこのほかに同『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』、平成 20 年 8 月初版、平成 27 年 3 月第五版および同『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』、平成 22 年 5 月初版、平成 25 年 9 月再版も参照した。

² 前掲書 54 頁参照。

になること。

- ・基本単語 500 語以上の習得を目指す。

最後に挙げた基本単語 500 語については、生徒たちが一年間の中国語学習の総仕上げとして毎年 3 月末に中国語検定準 4 級を受検するため、そのレベルで必要とされる単語数となっている。また、単語数が増えれば増えるほど会話の内容や表現の幅が広がることから、より多くの単語が習得できるよう、授業二回につき一度単語小テストを実施し定着をはかっている。

2) 教材

① 教科書

第二外国語用の教材の多くは大学で用いられることを想定して作られたものが多く、中学生と高校生が学ぶものとしては内容がやや高度である場合が多い。現在筆者が担当しているクラスでは、梁継国、大森真理『中国語の時間』（付属 CD 付、朝日出版社、2007 年）を教科書として用いている。全 16 課で構成され、一貫生は中二から高一までこの教科書で学び、高入生は高一の時のみ用いる。内容も比較的平易であり、文法事項が明瞭かつ練習問題の充実ぶりが特徴である。また本文が会話形式で進められ、ある程度の長さがあり、授業内で生徒に課す暗唱課題に適している。

② 単語集

教科書のほか、董燕、遠藤光暁『わかる中国語単語 1000』（朝日出版社、2000 年）も使用している。この単語集は中国語検定準 4 級、4 級レベルの単語が収録してあり、入門から初級を学んでいる生徒たちが取り組みやすいレベルのものである。授業二回につき一度実施している単語小テストは教科書の新出単語のほか、この単語集からも出題する。当初、単語小テストの範囲は事前に大まかにページのみを指定するだけであったが、点数が芳しくないことが多かったため、今では出題する単語をすべて告知している。点数の高い低いに一喜一憂するのではなく、簡体字、ピンインが

きちんと正しく書けることのほうが何よりも重要である。簡体字とピンインの指導にいたっては、生徒たちが正しく書けるのかどうかを確認するために単語小テスト実施前にノートを回収し確認にあたっている。そのため、生徒たちは授業用ノートと単語練習ノート（提出用）の二冊を使う。

③ “背诵卡” と “积分卡”

このほかに授業中に用いるものとして、“背诵卡”（暗唱カード）と“积分卡”（ポイントカード）がある。暗唱カードは教科書本文の音読および暗唱をする際に使用する。『中国語の時間』の各課の本文は王麗と大森哲也の会話で進められており、音読は全文、暗唱する箇所は重要な文法事項を含んだ会話6つ分を指定している。生徒はまず自分で本文の音読を練習した後、クラスメイト一人にそれを聞いてもらい、発音に問題がなければ暗唱カードにそのクラスメイトにサインをしてもらう。その後生徒は筆者の前で音読し最終チェックを受ける。その次に暗唱に入るが上記と同じ流れで進める。暗唱カードを用いるようになってからは、生徒たちにとって、練習のために家で教科書付属CDを聞く習慣が付き、また教科書の内容がより深く定着するようになったという効果が見られた。ポイントカードについては授業内の中国語での発言一回につき2ポイントを与えることになっている。挙手をする生徒は限られているのだが、ふだん挙手をしない生徒にも必ず指名し、クラス全員一人につき授業内で最低でも一度は中国語で発言する機会を作っている。発音が良い生徒にはさらに1ポイント上乘せしている。最初は恥ずかしがっていた生徒も今では積極的に挙手をする姿が見られるようになった。

④ その他

また、授業内では教科書の補足としてプリントを配布することも多く、ファイルも必要となる。プリントについては一人につき一枚のみ配布し、欠席した場合は後日個別に配布するが、自ら紛失した場合は再度配布することはしない（その際はクラスメイトに借りてコピーすること）というルールを第一回目の授業で伝えてあるため、余っているプリントをほしい

と要求してくる生徒は皆無である。担当しているクラスの生徒は、休み時間のうちに職員室に来て忘れ物の報告をしに来るほどである。このような行為は各担任の先生方のご指導の賜物であるが、その一方でこちらも中学生や高校生というまだ管理が必要な生徒たちの指導をしていることを忘れてはいけないと感じる瞬間でもある。

3) 通常の授業

授業については上記2) 教材でいくつか言及しているので、ここではより詳しくその補足として通常授業の流れをご紹介します。東京女子学院では授業時間はいずれも50分に設定され、まれに学校行事との兼ね合いにより時間割が変更となることもあるが、ほぼ固定されている。他教科の授業はまず起立の号令がかかり「ごきげんよう」ではじまるが、中国語は「大家好!」「老师好!」ではじまる。着席後、中国語で一人一人の名前を呼んで出席を確認し、その後授業に入っていく。通常授業の流れは以下の表二のとおりとなる。

表二 通常授業の流れ（小テストを実施しない日）

13:10	号令、挨拶、着席、出席確認
13:15	前回の授業の復習（口頭で確認）
13:25	教科書本文を使つてのシャドーイングまたはディクテーション ※この時はノートのみを使い、教科書を開いてはいけない
13:35	暗唱カードを使つての練習 席の移動は自由
13:40	新しい内容の説明、導入
13:58	次回の授業について、提出物など注意事項があれば合わせて伝達
14:00	終了

小テストを実施する場合は、シャドーイング（ディクテーション）の10分間を使う。問題数が少ない場合、採点は生徒同士で問題用紙を交換

して行い、問題数が多い場合は回収しこちらが採点する。間違え直しは必須であり、問題用紙の裏か単語練習ノートにやり、提出してもらう。

毎授業では必ず暗唱カードを使っての音読・暗唱練習がある。この10分間だけは席の移動を自由にさせる。クラスメイトや筆者に発音を確認してもらいながら練習する生徒、黙々と一人で暗唱練習に励む生徒とさまざまである。心配していた私語が思いのほか少なかったのは、聞こえてくるのが中国語だけの中、日本語を話せば自分だけ目立ってしまうことを生徒自身が知っているからなのかもしれない。音読・暗唱練習の前にシャドーイング（ディクテーション）を行うのは、聞くこと、話すこと、書くことを通じて教科書本文の内容を定着させるためにはかならない。50分間という時間は実にあつという間であり、想定よりもはるかに授業が進まない時もあるが、授業内で聞くこと、話すこと、読むこと、書くことをできる限りバランスよく含めることに留意しなければならない。

4) 授業に関してその他

表二で挙げた授業の流れは筆者にとって運営しやすいやり方である一方、生徒たちにとっては退屈になってしまう時もある。とくに昼食を終えた後の13時10分開始の日では眠気がピークに達する生徒も出てくるし、また大きな学校行事の前後であればその準備、片付けに追われて疲れ切っている生徒もいる。そのような時は「文化講座」と称して授業のはじめに中国文化や生徒たちが興味を持ちそうな現在の中国での流行について話したり、中国に関する新聞記事があればそれを配布し皆で考えたりすることもある。2015年11月14日付の読売新聞にて「自動翻訳時代の語学」という記事が掲載され、この記事を利用して生徒たちと討論をする機会があった。自動翻訳の精度が高まっている今の時代になぜ外国語を学ぶのかという問いは生徒からすれば少し意外なものであったようだが、「自動翻訳にすれば人件費が減る」「自動翻訳は何ヶ国語にも対応できる」「自動翻訳に頼るのも良いことだが、それだけでは伝えきれないこともある」「自動翻訳の端末が故障したら使えなくなってしまう」などさまざまな意見が出され盛り上がった。

中国で流行している芸能人や歌手、最近ヒットした中国映画については生徒たちの興味をよくひきつける話題である。生徒たちのほぼ全員が家でインターネットを使うと答えており³、興味を持ったことは自分でじっくり調べることができる。検索は日本語の漢字でも代用できるが、より多くの情報を得るには中国語（簡体字）を使って検索できればより望ましい。それにはピンイン入力が必要であるため、そのやり方と練習については今後授業内に時間を設けて指導していきたい。

中国に関する新聞記事の収集はこれまで夏休みの課題としてきた。夏休み前最後の授業で A4 の紙一枚を配布し、そこに自分が見つけた中国に関する面白いまたは興味深い記事を貼り、「記事の概要」「なぜその記事に興味を持ったのか」「記事で扱われた内容について自分はどう思ったのか」をそこに書き込み、二学期最初の授業で提出してもらおう。インターネットでも記事が出てくるとしても、今回は新聞からの記事のみを認めると伝える。インターネットの記事であれば、あるキーワードのもと、自分が興味のあるものだけを追求してしまいがちだが、新聞の場合はそうはいかない。新聞に目を通していく中で、さまざまな記事に触れることにより「今何が起きているのか」を知ることができるし、さまざまな話題の中から自分がどんなことに興味を持ちやすいのかを自分自身で感じるができる。また、中国に関しては昨今のメディア等の報道により偏ったイメージを抱いてしまう人が多い中、中国のこれまでとは違った面を発見することにより、従来のイメージの殻を自ら破り、より公平な中国の姿を知ってほしいというのは筆者のねらいである。

³ 筆者が担当する中二、高一（高入生）計 18 名のうち、家にインターネット環境がない生徒は 0 であり、家族からパソコンの利用を禁じられているためにインターネットができない生徒が 1 人いた。その他 17 人の生徒は家でインターネットの使用を許可されているとの回答を得た。11 月 28 日の授業の際に実施した聞き取り調査による。

5) 国際交流の機会

今や街角には中国人観光客で溢れているものの、生徒たちが実際に中国人の方々と交流する機会は少ない。2012年度に3名の生徒たちが学外の中国語スピーチコンテストに参加した際、事前に筆者の友人である中国人女性を学校にお招きし、参加する生徒たちの発音指導をしていただいた。それだけではもったいないと、筆者が担当するクラスにもゲストスピーカーとしてお招きし中国の学校についてお話していただく機会を設けた。生徒たちとほぼ同年代である中国の受験生（中学生、高校生）は基本的に学校の寮に住み、朝7時から夜遅くまで学校で勉強に励むこと、昼休みは二時間と日本よりも長いため、昼寝することが多いとの話は新鮮だったようである。基本的に日本語でお話していただいたのだが、時折生徒たちが聞き取れるような平易な中国語も交えてくださり、また生徒たちがゲストスピーカーに質問することも多々あり、終始和やかな時間であった。授業後、生徒たちが口々に「自分が話した中国語が通じてとてもうれしかった」と目を輝かせながら話す姿が印象的であった。このような機会を毎年度いずれかの時期に一度設けたい。

6) 中国語検定について

一年間の中国語学習を経て生徒たちが最後に挑戦する壁は中国語検定準4級である。日本中国語検定協会が定める準4級の出題内容は「基礎単語約500語（簡体字を正しく書けること）、ピンイン（表音ローマ字）の読み方と綴り方、単文の基本文型、簡単な日常挨拶語50～80」⁴である。中二と高一（高入生）の全員が例年3月末に受検することになっている。一学期と二学期で初級の文法事項を学び、三学期の授業ではこれまでの復習をふまえて、過去問の解答解説を繰り返していく。準4級の合格状況は毎年変動があるものの、中二が3～4割、高入生が5～6割ほどで移行している。この合格者の人数をさらに上乘せすることが目下の課題である。

⁴ 財団法人日本中国語検定協会 <http://www.chuken.gr.jp/>（最終アクセス日：2015年12月5日参照）

結び

中国語を教えはじめた頃は失敗の連続であった。筆者自身、中国語は大学の中国語学科に入学してから学び始めたものの、初歩の初歩である四声の習得でつまずき、大変苦勞しながら学んだ。このような自分の経験から、発音の指導はじっくり進めていこうと思っていた。しかし、しばらくすると違和感を覚えた。発音練習ばかりの授業になってしまい、生徒たちを退屈させていることに気がついたのである。確かに時間をかけて指導したほうが良いと思われる生徒もいるが、授業内で発音の基礎を習得している生徒もいる。発音の指導を続けるべきか、ある程度のところで見切りをつけるのか、悩むところであった。

自身の学部時代を思い返してみれば、確かに最初は発音の習得に大苦戦したが、先生方や友人らにご指導をお願いしながら練習を続けたことにより、何らかの糸口が見えてきたのであり、最初にできなかったことはいつまでもできないとは限らない。そこから「発音習得の呪縛」から逃れ、発音の指導は必要最低限にとどめ、だいぶ大らかに行うようになった。

筆者が東京女子学院での授業で重視しているのは、「中国語嫌い」を作らないことに尽きる。高入生についてはもし仮に「中国語嫌い」になったとしても履修の都合上それは一年間の辛抱ですむのだが、中二のうちに「中国語嫌い」になってしまえばその後も続く二年間の中国語学習に大きな影響を残してしまう。その一方で中国語学習を楽しみにしている生徒たちの満足度を高めることも必要である。それらの点を常に意識しながら授業の運営をしている。「中国語嫌い」を極力減らし、一人でも多くの「中国語好き」を増やし、ひいては長期的に中国語学習に取り組もうとする生徒を育成することこそが、筆者にできる日中の架け橋の一助となることを願ってやまない。